

高田保馬記念講演会

——経済思想の源流をさぐる——

はじめに

八木紀一郎

京都大学が生んだ偉大な経済学者高田保馬（1883年—1972年）を記念する公開講演会が、2004年12月14日夕に時計台記念館で開催された。かつて高田保馬が「経済原論」を講じた法経1番教室が生まれ変わった「百周年記念ホール」に、学内者学外者合わせて250名以上の聴衆が集まり、雨宮健スタンフォード大学教授の講演に耳を傾けた。

これは、経済学研究科・経済学部が本学の経済研究所とともに実施している21世紀 COE プロジェクト「先端経済分析のインターフェース」の一環として企画されたもので、本学における先達研究者の精神を継承しながら経済学の現状を顧みるとともに、未来につながる新しい研究分野を切り開こうとする姿勢を示そうとしたものである。戦前・戦中期に本学で経済原論を講じた高田保馬は、日本の経済学界に一般均衡理論を導入するとともに、その独自の社会学と結びつけて、社会的な勢力を経済分析に導入する「勢力説」を提唱した。講師として演壇に立たれた雨宮教授は、数理統計と計量経済学の分野で文字通り世界の学界をリードして来られた方で、高田保馬記念講演にふさわしい学者である。

はじめに森棟公夫教授が、体調を崩した西村周三研究科長の代理として、記念講演会の趣旨と講師の紹介をされた。また、この会のために急遽駆けつけられた高田門下の市村眞一本学名誉教授が、師の業績と人となりを語られた。

雨宮教授は、演題として「古典期アテネの経済思想」を選ばれた。計量経済学者と古代アテネというのは、多くの人を驚かせる取り合わせである。しかし、オイコス（家）とノモス（法）という語を結びつけてオイコノミア（経済）と

いう語を作り出したのは、まさに古代アテネの哲学者たちであった。雨宮教授は、現在を遡ること二千数百年の昔に聴衆を誘い、経済思想が生まれる源流を明らかにされた。雨宮教授の講演は、古代アテネの経済に近代と共通な点を重視する「形式主義者」と逆に異質な点を強調する「実質主義者」との対立のなかで、バランスの取れた見方を提供するとともに、古代ギリシア人たち（クセノフォン、プラトン、アリストテレス）の経済思想が倫理思想・政治思想と密接に結びついていたことを示すものであった。多くの聴衆は、そこに一人の現代経済学者が、かつて高田保馬がそうであったようなモラリストとしてあらわれ、経済思想の根元を探ろうとしていることに共感した。

当日の講演は、時間の不足から、配布された講演要綱の半分程度で終わらざるをえなかった。しかし、幸いなことに、雨宮教授は、講演の原稿の印刷・公表の許可を講演企画者の私に与えられた。本誌に掲載するものがそれである。

最後に、この講演会が講師の雨宮教授はもちろんのこと、高田家のみなさま、高田門下の諸先生のご好意とご理解の上に実現したことを記して、謝意を表明いたします。

あ い さ つ

森 棟 公 夫

研究科長・学部長の西村が体調が悪くご挨拶ができませんので、私森棟が代理をつとめさせていただきます。本日は、本学にとって偉大な先達である高田保馬先生を記念して開く講演会でありますので、まず高田保馬先生を紹介し、その後に記念講演をしていただく雨宮健スタンフォード大学教授の紹介をいたします。

配布された資料をごらんください。高田保馬先生の年譜や主要著作がありますがそのなかにシュンペーターが本学に来られたときの記念写真も入っています。シュンペーターの横に居る和服の方が高田先生です。